

『光源氏一部連歌寄合』索引稿

岩 下 紀 之

二条良基による源氏寄合書が世に知られたのは、第二次大戦前のことであったが、以後活発に研究がなされたとも見えない。ところが加藤洋介氏の「二条良基周辺の源氏学―国文学研究資料館蔵『光源氏一部連歌寄合』の紹介と翻刻―」（国文学研究資料館紀要第十八号）によって、新たな局面をむかえた。

この論文の注（3）に、堀部正二、福井久蔵、岡見正雄、寺本直彦、伊井春樹諸氏の論著が掲げられている。堀部、福井両氏の論文はこの書の内容を紹介するもので、昭和十二、三年の業績である。岡見氏は古典文庫に全文を翻刻し、解説を付した。寺本、伊井両氏は源氏物語の受容史、注釈史の名著を著わされ、その一部として本書を取り扱われたのである。約六十年の研究史の流れのうち、言及された研究者はこの五名であった。

さて、源氏物語の研究水準から見て、源氏の研究者が例えば定家の連歌が夕顔の一場面を踏まえているのを発見することとはたやすいのであって、寄合集をひもとくまでもない。それを必要とするのは、当時の連歌初心者と、現代の連歌研究者である。木藤才蔵、重松裕己両氏によって「連珠合璧集」が出版されるや、ただちに各研究者の座右の、不可欠の書となったが、それは合璧集が最も組織的で完備した寄合集であるとともに、正確な頭注と索引が付されていたからでもある。しかし、「光源氏一部連歌寄合」は、不遇な書物であった。良基の大方の論書とともに、これも広くは流布せず、活字化されてもあまねく利用されたとは言いがたい。その理由は、第一に本文が、源氏諸本のさまざまな本文群のうちで、ど

のような位置をしめているかが不明であり、信頼性がはかりがたかったこと。次に寄合集として具体的な利用法がよくわからなかったことである。寄合とは、ある一語に別の一語が対応するのであって、古典文庫本のように、桐壺の巻に、「まうけの君」、「をみつけて」、「をもやせて」以下の語が単に連記されているだけであると、隣合うそれぞれが寄合なのかどうか判断に苦しむこととなる。

加藤洋介氏の論考を画期的と考えるのは、右の疑念を一掃したことにある。各語を「源氏大成」と照合して、諸本との異同を明らかにし、当時の源氏の混成本文の存在を想定、あるいは、編集に協力した人々が所持していたそれぞれの本文が融合したことを想像されるのである。^(注一) また資料館本の記載方式、すなわち、「女車^編」のような「小書で記された語が付合となる」ことを発見された。^(注二) 物語本文に存在しない語が出現することについては、「源氏聞書」を援用され、「小野菴^{の宮}」と匂兵部卿の巻に掲げることの説明を果している。^(注三) この巻の物語本文には、「小野」の語がないのだが、他の巻での記述を参照して、寄合であると説かれたのである。

こうしてみると、本書は実用的な問題意識のもとに編まれており、活用される時を待っていたのである。簡単な索引を作って連歌作品と照合し、その当時の連歌実作に源氏寄合が活用されていたか否か、今後の調査に使用してみたい。

注

注一 加藤氏論文135ページ。

注二 同123ページ。

注三 同136ページ。なおこのことについては、伊井春樹氏「連珠合璧集に見られる源氏寄合」(『連歌とその周辺』所収) 427ページ。後「源氏物語注釈史の研究」971ページに別の例を引かれる。

凡例

本索引は主に古典文庫本に対しての索引である。もっぱら実用をむねとし、それ以外の問題意識はない。各語をそのまま機械的に見出語として配列し、どの巻に現れるかを記した。その際現在普通と思われる巻名表記に改めた。ただし配列順は歴史的仮名遣いによっている。なお加藤氏論文の主要な校異によって一部以下のように意改を加えている。上に古典文庫本文、下に訂正したかたちを示す。

桐壺

めのかたち

女のかたち

あま

こま

箒木

なか

なか

須磨

うらはかき

こしはかき

はらきなき

はらきたなき

とう

とら

数のすかた

かりのすかた

少き鳥

小き鳥

うゑし若木 碁

のさくら

うゑし若木のさくら 碁

石はし

石のはし

滯標

つかみしかき草

つかみしかき筆

蓬生

こたか

こたち

松風

かきのきし

かのきし

槿

雪のまろかし

雪のまろはし

常夏

みゝかた

みゝかたき

藤裏葉

いさきゐの水

いさらゐの水

柏木

世の中のけふり あすか 世の中のけふかあすか

横笛

ちかき村

ちかき林

山になれる所

山にほれる所

夕霧

色こきはね

色こさいね

御法

きをあらそふ露の世

きをあらそふ露の世

橋姫

ひしり たちたる

ひしりたちたる

藤衣

藤衣

椎本

あそひ柳

河そひ柳

総角

つた絵

つた 絵

にわひて あか月の嵐

あか月の嵐にわひて

宿木

いほの中

いはほの中

なお資料館本のみにならわれる語をおさめたが、索引の内では巻名の前に資という字を付しておいた。以下に記すとおりである。

箒木 しもや

夕顔 しのひありき

若紫 草の室 行過かたき

末摘花 こそにうたる、はひをいれたる わかきものはかたちかくす あた、かけなる よもきに

紅葉賀 かさしの紅葉

榊 秋の花をとろへて あさちか原 しめのうち 物思はしき

須磨 大江との しらぬ国 枕をそはたて、をくる

明石 いはほも山も 浦はなれたる家

蓬生 浅茅か宿笠

絵合も、あゆみ たけとりの おきなうつほ

松風 をきのつと

薄雲 つかさかふり

玉鬘 ふなことも 廿年

真木柱 そらなき

梅枝 くろほう

若菜上 心のふかき 手向ぬさ

若菜下 夢人の涙をのこふ 我袖

夕霧 かきほのなてしこ

紅梅 花やわくらむ

竹河 めをそはむる

橋姫 しけきの中 かんなき

また和歌の各句索引を作ったが、これは古典文庫本の本文を歴史的仮名遣いで仮名書きしただけで、資料館本は参照していない。

寄合索引稿

【あ】

あかきこのみ	蓬生	あさはなた	玉鬘	あふき	紅葉賀 花宴
あかし(明石)	明石 濔標 松風	あしよは車	須磨	あまかつ	葵 宿木
あかたてまつる	松風	あしろ車	御幸	あまのいはや	薄雲
あか月の嵐にわひて	榊	あしろ屏風	榊本	まの家	須磨
あかもたれひき	総角	あすかみうたふ	須磨	あまのさへつり	須磨 松風
秋の草おとろへたる	真木柱	あすのわたり	早蕨	あめにますとよおかひめ乙女	
秋のたのみ	榊	あた、かけなる	資末摘花	あやしき風	明石
秋の花をとろへて	明石	あつま	若葉下	あやめかさねの文	螢
秋やはかはる	資榊	あつま声	東屋	あゆ	常夏
あけくれの夢	榊本	あなかま	箒木	あらしふきそふ	箒木
あさかほ	御法	あなたうと	胡蝶	あらしし衣	藤袴
あさす、み	榊 檀 宿木	栗田山	関屋	ありへても	蓬生
あさちか原	榊本	あわちしま	明石	あるし	箒木 松風
浅茅か宿	資榊	あはれにすこき	須磨	いかた、め	東屋
あさちはら	資蓬生	あひなたのめ	明石	いかまほしき	桐壺
	榊			池のこ、ろ	桐壺

いけみころしみ	蛩	いはせのもり	早蕨	うつせみ	箒木
いさよひの月	末摘花	いはほの中	宿木	うつほ	資絵合
いさらゐの水	藤裏葉	いはほも山も	資明石	卯つち	浮舟
石のはし	須磨	いはをも山をも	明石	うはそく	橋姫
石ふし	常夏	いまこゝにありて	須磨	馬牛	蓬生
いせしま	須磨	いましめ	梅枝	馬にいねかふ	須磨
いせのつかひ	須磨	いもかかと	若紫	馬に草かふ	夕霧
伊せ人	須磨	いよのゐけた	空蟬	海すこし	須磨
いたかき	蓬生	入かたの月	榊	海つら	須磨
いたち	手習	色こきいね	夕霧	海にます神	明石
いたつら人	夕霧	うかひ	松風	海の衾をはりたるやうなるなみ	須磨
いたつらふし	箒木	うき木	松風	浦はなれたる	明石
いたや	榊	うき舟 (うきふね)	東屋	浦はなれたる家	資明石
いつきの宮	榊	うしろの山	浮舟	蜻蛉	紅葉賀
五のさはり	匂宮	歌うたふ	須磨	うりつくり	紅葉賀
いなくら	明石	うちゑみて	須磨	うゑ木	須磨
いのちさへ心ありける	鈴虫	宇治	桐壺	うゑし若木のさくら	須磨
命なかさのいたつらに	桐壺		橋姫	椎本	夕顔
しのひありき	資夕顔		早蕨	宿木	蜻蛉
			浮舟	手習	末摘花
				おきなすかた	

おくり物	桐壺	おもはぬ山	夢の浮橋	笠	資蓬生
をくる	資須磨	おもひけちて	桐壺	かさ、き	浮舟
おこなひ人	榊明石 夕霧	おもひこりたる	空蟬	かさしのきく	紅葉賀
おさなき子	松風	おもひ子	濡標	かさしの紅葉	資紅葉賀
おたき	桐壺	おもやせて	桐壺	かさしのわた	初音
落葉のみや	匂宮	おゐつけて	桐壺	かすめしやと	明石
おとなしのさと	宿木			風にきせつるもみち	箒木
おとなしのたき	夕霧	【か】		風のさきに	野分
鬼	蜻蛉	かうふり	薄雲	かたかけて	松風
おにかみ	箒木	かうもり	紅葉賀	かたこと	薄雲
おほうち山	末摘花	か、やく日のみや	桐壺	かたちあらはず	蓬生
大江との	資須磨	か、り火	若紫 薄雲 篝火	かたち人	若菜上
大かき	榊	かきほの	夕霧	かたらふへき	花宴
おほそらのほし	蓬生	かきほのなてしこ	資夕霧	かちゆみ	若菜下
おほふばかりの袖	野分	かくしふみ	須磨	かつら	薄雲 薄雲
おほみや人	須磨	かくす	資末摘花	かつら河	榊
おほやしま	榊明石	影もよしとうたふ	箒木	桂の木	花散里
おほゐの河	松風	影よはりたる日	夕霧	桂の里	松風
おもつらひけ也	椎本	かけるふ	蜻蛉	かつらひけ	椎本

かとりのおきぬ	須磨 橋姫	かりころも	手習	草のむしろ	若紫
かとかとしき	若菜上	かりのすかた	須磨	草の室	資若紫
門田のいね	手習	かりのつら	須磨	草のもと	桐壺
かなうす	梅枝	かれたる花	槿	くち木の本	宿木
かねのみさき	玉鬘	かれの、むし	榊	くひな	明石 潘標
かのきし	松風	かほる	匂宮	雲の林	榊
河そひ柳	椎本	かんなき	資橋姫	くもりかちなる	末摘花
河つら (川つら)	松風 椎本	きえをあらそふ露の世	御法	くもり日	梅枝
川よりおち	椎本	菊	箒木	雲の雁	夕霧
かはさくら	野分	さくの花	榊 宿木	車	潘標
かえり見かちに	箒木	二月廿日	須磨	車	総角
神のしるへ	明石	さし	御幸	くろ木のとりぬ	榊
かむわさ	若菜下	北山	若紫	黒こま	須磨
からうす	夕顔	きつね	夕顔 蓬生 蜻蛉	くろほう	資梅枝
からき	花宴	きぬ一くだり	桐壺	子	薄雲
から国	須磨	きりきりす	総角	ここにうたる、	末摘花
からす	若紫	さりのまかき	若紫	心おくれ	箒木
からのかみ	須磨	草のとさし	若紫	心つくし	須磨
かりきぬすかた	末摘花	草の花	須磨	こゝろのうら	薄雲

こゝろの鬼(心の鬼)	榊 明石	ことのほそを	紅葉賀	酒のかわらけ	須磨
心のくつおれて	乙女	こと葉のかきり	総角	さゝめこと	若菜上
心のぬるき	若菜上	小鳥	松風	さゝれ水	藤裏葉
心のふかき	資若菜上	ことをまくらして	篝火	さとはなれ	須磨
心はしり	浮舟	この老人	橋姫	さわらぬ月	桐壺
心おさなき	若紫	このかみ心	総角	さまかへて	桐壺
こしはかき	簀木 榊	胡の国	須磨	さむきすさき	浮舟
小嶋かさき	浮舟	この世なれたる	蛭	しかのたゝすむ	若紫
こすみうすゝみ	乙女	こまのわたり	紅葉賀	しかのもろ声	榊本
こそにうたるゝ	資末摘花	こま人	桐壺	時雨かちなる	薄雲
小鷹狩(こたかゝり)	松風 手習	こゆみ	若菜上	しけきなげき	関屋
こたち	蓬生	衣かへ	明石	しけきの中	資橋姫
こたま	蓬生 蜻蛉	碁	空蟬 須磨 竹河	しのひある風	榊
こてふ	胡蝶		宿木 手習	しのひあるき	夕顔
琴(こと)	花散里 須磨			しのふくさ	蓬生
	松風 橋姫	【さ】		しはといふ物	須磨
ことありかほ	若紫	さかき	榊	しみつのみてら	玉鬘
ことすくな	若紫	さかな	簀木	しめのうち	資榊
ことのおくろ	明石	桜をかけ物にす	竹河	しめの外	榊

霜はな	葵	せはきふところ	明石	た、すむ鹿	夕霧
しもや	資箒木	袖のしくれ	椎本	たちはな	花散里
しらか	初音	そへふし	桐壺	たつ	須磨
しらぬ国	資須磨	空色かみ	葵	たつた姫といはんにもつきなからす箒木	
しるしの帯	宿木	そらなき	末摘花	たて石 (たていし)	明石 松風
すゐかき	末摘花	そらなき	資真木柱	たなはた	東屋
杉下	閑屋	そらなけき	真木柱	七夕のてにもおとるましく箒木	
隻六 (双六)	須磨 常夏			旅衣うらかなしき	明石
す、か川	榊	【た】		たまくら	篝火
す、むし	桐壺	たかしほ	須磨 明石	玉のはこ	夕霧
す、めの子	若紫	たかむな	横笛	玉のゆくへ	御法
硯のあたり	初音	滝	夕霧	手向	資若菜上
硯の水	末摘花	たき、つきなん	御法	たむけのきぬ	若菜上
すたれおしまく	常夏	たきのよとみ	初音	たもとせはき	蓬生
すのこ	榊	たき物	箒木 絵合 梅枝	たらひの水	蓬生
須ま (須間)	須磨 明石	竹あめるかき	須磨 橋姫	たはむ心なき	空蟬
すまあかし	絵合	たけかは	竹河	千枝	須磨
墨つきほのかに	箒木	たけとりのおきな	資絵合	ちかき河	常夏
住吉神	須磨	竹の子	蓬生	ちかき林	横笛

ちかまさりする	明石	つまはしき	真木柱	【な】	
千里	須磨	つみうる事	若紫	なかかは(なか川)	箒木花散里
小き鳥	須磨	つみさり所	夢の浮橋	なかやと	椎本
ちいさきふね	浮舟	つよき心	箒木	なか雨	須磨
長奉	榊	つらつへつきて	若菜上	なかくおくる	榊
つかさ	薄雲	つるはみのきぬ	藤裏葉	なか月	葵
つかさかふり	資薄雲	てくるま	桐壺	なきこかれ	桐壺
つかさめし	葵	てならひ	若紫 須磨 手習	なきみわらひみ	松風
つかみしかき筆	滯標	手にもとられぬ	蜻蛉	なきさのとまや	明石
月のかほ	須磨	戸くち	花宴	なてしこ	葵 夕霧 手習
月のみやこ	須磨	とこなつ	箒木	なてしこの露にぬれたる	桐壺
月日の光	明石	とこよ	須磨	難波のみそき	滯標
つくし	玉鬘	となり	夕顔	波た、こ、もとに	須磨
つく、し	早蕨	とのゐすかた	須磨	泪川	早蕨
つくり絵	須磨	とのゐ申	榊	泪のこひて	乙女
つた	総角	とのゐもの、ふくろ	榊	泪のみを	真木柱
つ、らおり	若紫	友千鳥	須磨	名もしらぬくさ木	若紫
つなてひく舟	須磨	ともよふかり	乙女	なるかみ	夕顔
つましるし	乙女	とら一	榊	にし河	常夏

にしきをかくす	松風	鳩	夕顔	ひしり心	幻
にわとり	総角	はな蘆	胡蝶	ひしりたちたる	橋姫
ぬさ	資若菜上	花散里 (花ちるさと)	花散里 濔標	火たきや	榊
ねこ	若菜上 若菜下	花のあらそひ	竹河	ひたひく	手習
ねたむ	真木柱	花のかたはら	紅葉賀	ひちかさ雨	須磨
ねなきかちなる	濔標	花やはつらむ	紅梅	ひつしのあゆみ	浮舟
のきのたるひ	浮舟	花やわくらむ	資紅梅	人かた	須磨
軒はのおき	空蟬	は、そはら	乙女	一ささみ	桐壺
野宮 (野の宮)	葵榊	はるおくれたる	末摘花	人けなき身	桐壺
野分	蓬生 野分	はひをいれたる	資末摘花	人にしむ心	夕顔
【は】		はまの家	明石	人にまけしの心	竹河
はことり	若菜上	はやり心	末摘花	人の涙をのこふ	資若菜下
橋うちわたし	竹河	はらから	夕顔	人の御門	桐壺
廿年	資玉鬘	はらきたなき	榊	人めおとろく	桐壺
はちすのなかやとり	鈴虫	春秋のあらそひ	薄雲	火とりのはい	真木柱
はちすはのやと	鈴虫	春のさかつき	須磨	ひとりゑみして	若紫
廿日月	花散里	はけ物	蓬生	ひなあそひ	若紫 薄雲
はつもとゆる	桐壺	ひくらし	夕霧	ひまあるなか	濔標
		ひけこ	初音	百歩	絵合

ひしり心	幻	ひるこ	松風	ふなてして	明石
ひしりたちたる	橋姫	ひをむし	橋姫	文はしめ	桐壺
火たきや	榊	琵琶（ひわ）	紅葉賀明石	ほたる	薄雲
ひたひく	手習		橋姫	仏も神もゆるせかし	薄雲
ひちかさ雨	須磨	笛	榊木須磨	ほと、きす	花散里
ひつしのあゆみ	浮舟	ふくろふ	夕顔蓬生浮舟		
人かた	須磨	ふしまちの月	若菜下	【ま】	
一きさみ	桐壺	富士のたけ	若紫	まうけの君	桐壺
人けなき身	桐壺	ふすふる	榊木	まかり申	薄雲
人にしむ心	夕顔	ふすま	総角	まきの戸口	明石
人にまけしの心	竹河	ふせこ	若紫	枕のしつく	夕霧
人の涙をのこふ	資若菜下	二はの松	松風	枕もうくはかり	須磨
人の御門	桐壺	ふちかさね	絵合	枕をそはたつる	須磨
人めおとろく	桐壺	藤衣（ふちころも）	夕霧 橋姫	枕をそはたて、	資須磨
火とりのはい	真木柱	ふちつほ	桐壺	松かぜ	榊
ひとりゑみして	若紫	藤につくる文	乙女	松かさき	夕霧
ひなあそひ	若紫 薄雲	ふところかみ	紅梅	松しまのあま	須磨
ひまあるなか	漆標	船子	玉鬘	松のおもはん事もはつかし	桐壺
百歩	絵合	ふなことも	資玉鬘	松のはしら	須磨

松のひ、き	明石夕霧	峯の朝霧	橋姫	むらさきのうへ	野分
松の雪	末摘花	峯のくす葉	夕霧	むらさめ	野分
松むし	手習	峯のふる寺	椎本	めのと	濔標
松らのみや	玉鬘	みの日のはらひ	須磨	めをそはむる	資竹河
まいのあしふみ	紅葉賀	御舟あそび	胡蝶	めをそはめり	竹河
まへのなきさ	玉鬘	み、かたき	常夏	もとあらの小萩	野分
まほろし	幻	みやこ鳥	手習	物思はしき	資榊
まゆみ	篝火	みやこはなる、	須磨	物こりして	夕霧
鞠	若菜上	みやま木	紅葉賀	物のね	榊
みかは水	梅枝	むかはき	浮舟	物見車	榊
三日夜のもちゑ	総角	むくらしけるやと	手習	紅葉おりちらし	榊
三国ゆつり	濔標	むくらのかけ	浮舟	も、あゆみ	資絵合
みちの国かみ	末摘花	むくらのした	椎本	もろこしのうた	桐壺
三せかは	真木柱	むさしのといへはかこたれたまふ		若紫もろ恋	藤裏葉
三にしたかふ	藤袴	むせかへり	桐壺		
三のみち	蓬生	むち	蓬生	【や】	
水のおと	夕霧	むねあくはかり	明石	柳のきぬ	玉鬘
みてくら	明石	むらさき	末摘花	やえむくら	桐壺
三年	松風	むらさきかみ	乙女	山かつ	椎本

山かつめきて	須磨	行くかたき	若紫	よもきふのやと	末摘花 蓬生
山里	須磨	雪のまろばし	榎	よもきふのやとにて	蓬生
山さとび	橋姫	ゆふかほ	夕顔	四方の風	須磨
山田のひた	夕霧	夕月よ	桐壺	夜かたらぬ	横笛
やまとたましい	乙女	夢	資若菜下 横笛		
山とり	夕霧	夢にみなして	榎	【ら】	
やまとり	総角	夢のつけ	明石	りうたん	葵
山なしの花	総角	夢人の泪をのこふ我袖	若菜下		
山にほれる所	横笛	よこさまあめ	野分	【わ】	
山のいはや	橋姫	夜ころも	葵	わかき物	末摘花
山ひこ	手習	よしの、里	薄雲	わかきものはかたち	資末摘花
山ふところ	椎本	世にしほしみて	須磨	わかな	初音
やまふきのませ	胡蝶	世にしほしめる	夕顔	別のくし	榎
やまふし	明石	世のあちわひ	須磨	別のみそき	榎
山水のすみか	御法	世のうきふし	蓬生	我袖	資若菜下
やよひ廿日よひ	須磨	世のき、み、	若菜上	我ぬれきぬ	夕霧
やり水	若紫	世の中のけふかあすか	柏木	我身にしむる	薄雲
	薄雲	よふこ鳥	早蕨	わすれ草	須磨
行過かたき	資若紫	よもきに	資末摘花	わらはやみ	若紫

和歌各句索引稿

【あ】

わらひ	早蕨	おかしき	桐壺	おのゝへ	松風
我はかほなる	乙女	をきのつと	資松風	おはすてやま	宿木
いなかのたみ	明石	おしけなき身	柏木	おみなへし	手習
ゑ (絵)	須磨 明石	おしほ山	御幸	女	藤袴 匂宮
酔のかなしみ	総角	おちなるさと	手習	女くるま	葵
ゑみかほ	須磨	男は秋をあはれむ	若菜下	女のかたち	桐壺
	葵	小野	夕霧 匂宮 手習	女は春をあはれみ	若菜下
あきなれど	宿木	いかでかく	橋姫	いるとりの	真木柱
あきのやまざと	椎本	いかならむ	椎本	いろかはりぬる	宿木
あさぢふに	桐壺	いかにまがへて	榊	うきみづとりの	橋姫
あさぼらけ	橋姫	いきしにを	竹河	うきみをさめぬ	若紫
あはれとて	竹河	いとどしく	若紫	うちすてて	橋姫
あはれをしるも	花宴	いにしへも	桐壺	うつせみの	空蟬
あひみしことを	簀木	いへちをしらず	夕顔	うどんげの	若紫
あらかさぜ	桐壺	いるつきの	花宴	おぼろけならぬ	花宴
				おもはぬやまも	夢の浮橋

おもひこそやれ
おもふにも

桐壺
橋姫

けふぞたづぬる

宿木

すぎにしひとに

手習

【か】

かかるゆふぐれ

椎本

ことはのぞなき

箒木

せぜにわたさむ

東屋

かくやはひとの

夕顔

このもとに

空蟬

そことしるべき

桐壺

かぜのおとに

桐壺

こはぎがうへぞ

桐壺

そぼちつつ

夕霧

かぞふれば

箒木

こはぎがもとを

椎本

そらにことわる

榊

かほどりの

宿木

こはぎがもとを

桐壺

かむがきに

榊

こればかりやは

宿木

たぐひなく

若紫

かものこのよに

橋姫

こゑもききしに

宿木

ただたのみけむ

東屋

かよふとや

宿木

こゑもききしに

宿木

たちおくれけむ

橋姫

かれしより

桐壺

しげみをわけて

宿木

たづぬるみちを

夢の浮橋

きくもえならぬ

箒木

しづごころなき

桐壺

たづねこし

橋姫

きみがうきふし

箒木

しののめのみち

夕顔

たづねゆく

桐壺

きみにまかする

竹河

しらねども

手習

たまのありかを

桐壺

きりこめてけり

橋姫

しるしのすぎは

榊

ちぎりとぞおもふ

花宴

くにつかみ

榊

しるべにて

夢の浮橋

ちぎりとぞしる

橋姫

くものうへびと

桐壺

しるべにて

夢の浮橋

ちぎりとぞしる

橋姫

やへたつきりを
ゆめになしても
よがたりに
よそへてぞみる

夕霧
若紫
若紫
手習

【わ】
わがみとならば
わけぞゆくべき
をきはらや

竹河
夕霧
夕霧
夕霧

をじかなく
をれるさかきぞ

榊
榊本